

教育実習に思う

本日より来月の五日まで、三名の女子大学生が北中で教育実習に取り組みます。大学生と言っても浮ついたところは全くなく、初めて教育現場に飛び込むことに心地よい緊張を感じているようです。スーツに身を包み、礼儀正しく私にあいさつに來た彼女たちの目は輝いていました。

三名の内二名は大学四年で、既に岐阜県の教員採用試験に合格しており、来年度からの活躍が期待されます。一名は二人より一昨年下で、来年度の教員採用試験を受けるとのこと。いずれにしても、「教師になりたい」という強い思いをもっているようで、今年度ももって退職する私にとってとてもうれしいことです。

教育実習は、教育現場で教育の一部を実感する貴重な学びの機会です。一部と言わず、多くを学んでほしいとは思いますが、三週間という限られた時間の中では、正直言って教師の仕事の全てを学ぶことはできません。教師という仕事の魅力や素晴らしさ、苦しさや大変さに触れ、「教師になりたい」という思いがより確かになることを期待します。

大学で行われる「教師になるための勉強」は、もっぱら座学です。教員免許状を取得するために必要な講義を受けるだけです。実技があるとしても、学生は教えられる側に立ち続けるので、座学とさほど変わりません。そんな状況が一変するのが教育実習です。実際に生徒に接し、教える側、授業を作る側に回ることで、実習生にはどう映るのか。そのキーマンになるのが生徒の皆さんです。

古い話で恐縮です。私も大学生の時に旧釜戸中に教育実習に行きました。今から三十七年前ですね。母校での教育実習でしたが、大きな不安や緊張を抱いていたことを今でも覚えています。

しかし、その不安や緊張はすぐに消えました。それを消してくれたのが、当時の生徒たちでした。私の話すことを、真剣な表情でしっかりと聞いてくれました。授業をやったことがない私でしたが、教壇に立つ私の問いかけに進んで挙手して応えて（助けて？）くれました。給食の時は、生徒から気を遣って、私に積極的に話しかけてくれました。私の教育実習は二週間でしたが、あつという間に終わってしまいました。

実は、当時私が朝や帰りの会、給食にお邪魔した学級の生徒が、現在の北中の保護者の中にいます。立派な大人、すてきな保護者となつていることをうれしく感じる一方で、昔の私を知っている生徒がいると思うと、何だか恥ずかしくなってきました。

実習最終日、私は職員の前でこう言ってあいさつしました。

「教師になりたいという気もちは初めからありましたが、教育実習を終えて、なりたいたいという気もちがますます強くなりました！」

今日からの三名の実習生にも、そういう思いになってもらいたいと願っています。

（十月十八日 記）